【研究ノート】

ソウルのフレンチ村
——「ソレマウル」でのフィールドワーク

Fieldwork: Seoraemaeul, the French Village in Seoul

金 兌恩†

1. はじめに:ソウルの中の外国人まち

韓国における外国人数は、1990 年代前後から増え続け、2007 年に初めて 100 万人を超え、2016 年には 200 万人になり、全人口のうち外国人が占める割合は 4%程度となった[1)]。外国人数は、2019 年の 252 万 4,656 人(前年比 6.6%増加)[2)]を頂点に、2020 年度から新型コロナパンデミックの影響で 19%減少したが(法務部)[3)]、こうした中でも、韓国の大学に在籍する学位取得を目的とする留学生は増加しており[4)]、2021 年 11 月 5 日には、韓国政府の「with コロナ」政策の一環として、外国人労働者への入国制限の緩和が発表される[5)]など、教育や産業現場における外国人への関心が再び高まっている。

外国人の居住地域をみると、60%以上がソウルとその周辺の仁川・京畿道に居住しており、ある国や地域出身の人たちが特定地域に集住する現象がみられている。ソウルにおいては、大林洞・加里峯洞の「朝鮮族のまち」(金兌恩 2018)をはじめ、東部二村洞の「日本人のまち」、盤浦洞の「フランスのまち」(ソレマウル)、梨泰院洞の「ムスリムのまち」、光熙洞の「中央アジアのまち」、惠化洞の「フィリピンのまち」などが、外国人のまちとして知られている[6)]。外国人住民が急増したのは 1990 年代以降の比較的に最近の現象であるため、歴史的な経緯が存在するというよりは、主に社会・経済的な背景による集中現象であることが多く、また集住地域といっても、そこにおけるマジョリティを形成するほどの多数が居住しているわけではない。すなわち、外国人のまちとして知られている地域の多くは、その現実もさることながら、イメージとしての外国性を帯びていることも重要な意味をもつ。それぞれのまちが、現在のような外国人のまち、または外国性をもつまちとして知られるようになった背景には、その地域に特定の外国人の人口が多いことや、特定の国や地域と関連する店が集まっていること、そして、韓国とある国との間での友好関係の構築や、関連イベントの開催などに伴い、その国の出身者の多い地域に対する社会の関心が高まることなどが挙げられる。また、周辺にある国や地域と関わる施設が存在することも、外国人の居住を促す背景になることがあるが、それぞれのまちの形成や変遷の過程には、それぞれの独自の物語がある。

ソウルに存在する外国人のまちのうち、フレンチ村として有名なソレマウルは、他の外国人まちと比べていくつかの特徴がある。まず、韓国で暮らすフランス人の人口は、他の外国人のまちとして知られているところの外国人グループ(例えば、中国朝鮮族や日本、ムスリム、中央アジア、フィリピンなど)と比べて、その人数がはるかに

†立教大学社会学部兼任講師

少ない。韓国における全体外国人のうちフランス人が占める割合は 0.3%に過ぎず、ソレマウルに住むフランス人もそのまちの代表性をもつにはほど遠い、わずかな比率でしかない。にもかかわらず、ソレマウルのもつフランスのまちとしてのイメージはとても強く、また、このまちでフランスとのつながりがうかがえる様々なイベントが開催され、マスコミでも多く取り上げられるなど、社会的な関心が高いという特徴がある。

本稿では、こうした点に着目し、なぜソレマウルがフランス村として形成されたか、そして、どのようにしてそのイメージが維持・強化されてきたか、そのメカニズムを探る。また、ソレマウルでのフィールドノートやメディアの報道内容への検討を通して、フランス村としてのソレマウルの形成背景と現状について詳細に検討する。その際には、グローバル時代における「場と場のつながり」という点にも注目し、韓国ソウルの中のフレンチ村とフランスとの関係性、その構築と活用のあり方についてもみていく。

なお、ソウルのようなグローバル・メトロポリタン地域における外国人村、または外国性をもつまちに関する研究は、歴史的な背景をもつエスニック・マイノリティの集住地域が主な研究の対象となってきたといえよう。それに対して、本研究が注目するソレマウルの場合は、先述したような歴史的経緯があるわけではなく、わずかな居住人口をもつにもかかわらず、その国の学校や関連の文化的なイベントの招致などによって、地域全体にその国の外国性が付与され、それが地域の活性化またはジェントリフィケーションにも資源として活用されるという新たな傾向を代表する例として注目に値する[7)]。

2. 韓国で暮らすフランス人

2020 年現在、韓国に在留するフランス人は 3,091 人で、全体登録外国人（114 万 5,540）の 0.3%である（91 日以上滞在する登録外国人基準）。男女の比率はそれぞれ 57%と 43%であり、全体外国人の男女比率と比べて男性の比率が高い。上位を占めるフランス人の在留資格は、結婚移民が 561 人で最も多く韓国で暮らすフランス人の 18.1%を占めており、その次は、留学 16.7%、同伴 14.9%、特定活動 9.2%、一般研修 8.7%、企業投資 5.8%、貿易経営 4.8%などの順である。外国人全体をみると、非専門就業と訪問就業など非専門職の在留資格の割合が全体の 3 分の 1 以上を占めており、順位は、非専門就業 20.5%、永住 14.0%、訪問就業 13.3%、結婚移民 11.5%、訪問同居 9.0%、留学 8.8%、一般研修 4.3%などの順である。

在留資格に注目して韓国で暮らすフランス人の特徴をみてみよう（表1）。フランス人の場合、企業投資と貿易経営の割合が10.6%であり、また専門職の在留資格である特定活動の割合も 9.2%を占めているなど、専門人材の割合が高い。全体外国人の中では主流である非専門就業の在留資格をもつフランス人はいない。また同伴の在留資格をもつ人たちの割合が全体外国人の場合は1.7%に過ぎないが、フランス人の中では15%をも占めていて、韓国で暮らすフランス人の中には、専門職の人たちとその家族の割合が高いことがわかる。また結婚移民者と留学生の割合が全体外国人と比べて高いのも特徴である。結婚移民者のジェンダー比をみると、韓国における結婚移民者は韓国の男性と結婚したアジアからの女性の割合が８割を占めるほど高いが、フランス人の場合は反対の現象がみられている。2020 年現在、全体外国人のうち結婚移民者の中には男性が 20%、女性が 80%を占めているのに対して、フランス国籍者の場合は、男性が 76%、女性が 24%を占めている。つまり、韓国で暮らすフランス人の中には、韓国人の女性と結婚したフランス人の男性の方が多いと

いうことである。

＜表 1＞ 韓国におけるフランス人の在留資格（全体外国人との比較、2020 年現在）

順位	フランス人		全体外国人構成比（%）	全体外国人		フランス人構成比（%）
	在留資格	構成比（%）		在留資格	構成比（%）	
1	結婚移民	18.1	11.5	非専門就業	20.5	0.0
2	留学	16.7	8.8	永住	14.0	4.3
3	同伴	14.9	1.7	訪問就業	13.3	0.0
4	特定活動	9.2	1.7	結婚移民	11.5	18.1
5	一般研修	8.7	4.3	訪問同居	9.0	0.4
6	企業投資	5.8	0.5	留学	8.8	16.7
7	貿易経営	4.8	0.2	一般研修	4.3	8.7

＊91 日以上滞在する登録外国人を基準としている。韓国統計庁 KOSIS から作成。

居住地域を中心にみると、ソウル市に全体フランス人の 62%（1,920 人）が暮らしている。全体外国人の 3 分の 1 が工場などの多い京畿道に、21%がソウル市に居住していることからみると、フランス人のソウル集中現象はより顕著である。それは、韓国に居住するフランス人の中に、専門職と同伴家族、そして留学生の割合が高いことから、大手企業の本社やグローバル企業、経済機関、大学などが集中しているソウルへの集住現象を理解することができよう。

ここまで、韓国で暮らすフランス人の規模と特徴について検討してきたが、その人数は多いとは言いにくい状況であることがみえてきた。それでは、どのようにしてフランスのまち、ソレマウルが形成されたのか、その背景についてより詳しくみていく。

3. ソレマウルの形成とソウル・フランス学校

3−1. ソレマウルの形成

ソレマウル（Seorae Village）は、行政区域としてはソウル特別市瑞草区盤浦洞（ソレ路）の一帯（隣接する方背洞の一部も含まれる）であり、瑞草区はソウルの中でもフランス人が最も多く居住している地域である。ソレという名前は町の前を流れる小川（盤浦川）の様子から由来しており、「マウル」はまちの意味で、フランスとは関係のない名称である。

その一方で、ソレマウルの代表的な名所としては、ソウル・フランス学校やモンマルトル公園が挙げられているなど、フランスとの繋がりが強調されている。ソレマウルは、フレンチ村やフランスまちのほかに、「ソウルのモンマルトル」、「ソウルの中のリトル・フランス」、「プチフランス」などの名称で呼ばれている。先述のように、韓国の最大のフランス人の居住地域ではあるものの、人数としては、300 人程度のフランス人が居住しており、そのまちを代表するには至らないが [8)]、象徴性を獲得している点が注目に値する。ちなみに、ソレマウルの住宅街は、も

ともと富裕層の住居地の一つであり、そこに住むフランス人のほとんどは、フランス系会社の関係者や家族であり、ミドルクラス以上のフランス人であるという特徴もある。

ソレマウルにフランスまちが形成されるようになったのは、1981 年にソウル・フランス学校が龍山区梨泰院洞から移転してきたのがきっかけであった。さらに 1990 年代から TGV、カルフール、ルノーなどのフランス系大手企業が韓国へ進出したことで、もともとフランス人が多く居住していたソレマウルにより多くのフランス人が集まるようになった。ちなみに、TGV は、フランス規格の高速鉄道であり、1990 年代に韓国政府が初めて高速鉄道を導入することを決めたのち、日本の新幹線とフランスの TGV、ドイツの ICE が入札に参加したが、最終的にフランスの TGV に落札された。また、ルノーは、日産を吸収合併した頃に、当時、新たに自動車産業に参入したサムスン自動車を合併して、ルノーサムスンとして生産を続けることになったことなど、企業活動のグローバル化、またフランス企業の韓国進出の影響もあった。

このように、企業活動のグローバル化を背景として、すでに韓国ではアッパーミドルクラスのまちとして知られていた江南区や瑞草区にフランスからの企業関係者や政府関係者などの専門人材とその家族が多く住むことになったのであるが、それにはソウル・フランス学校の立地といった重要な前提条件があった。そして、徐々に、フレンチレストランやカフェ、パン屋、ワインバーなどが増えていき、観光地としても有名になっていく過程もみられ、いよいよソウルのフランス村としてのソレマウルが誕生したのである。

3−2. ソウル・フランス学校（LFS: Lycée Français de Séoul）[9)]

先述のように、ソレマウルにおけるフランス村の形成の重要なきっかけとなったのは、ソウル・フランス学校のソレマウルへの移転である。フランス学校は、国立の学校であり、138 カ国に 540 の学校が設置・運営されている。在籍数は 36 万 5 千人ほどで、フランス人の学生と外国人学生の比率は 4 対 6 である。基本的に幼稚園から高校までの一貫教育で、海外に滞在するフランス人はどこの国でもフランス国内と同等の教育を受けることができる。したがって、海外で暮らすフランス人にとってはフランス学校に通うことが前提になり、子どものある家庭はフランス学校の近くに住むことが多く、そのため、フランス学校の周辺にフランス村が形成されることはよくあるパターンなのである。

ソウル・フランス学校は、1974 年、ソウル市龍山区梨泰院洞で開校したが、1981 年ソレマウルへ移転されて以来、2001 年にはソウル市教育庁に学校登録を行い、翌年の 2002 年には在外フランス教育機関（AEFE）に加入した上で、学校名を現在の Lycée Français de Séoul（LFS）へ改名した。その後、この地域の高い地価や狭い学校空間の問題などで、他の地域への学校移転をめぐる議論があったが、移転への反対意見が多く、2016 年には再び増改築を行い、現在に至っている。幼稚園・小学校から始まったフランス学校は、現在幼稚園から高校までの一貫校として約 20 ヶ国の 450 人が在籍している [10)]。

4. ソレマウルでのフィールドワーク

ソレマウルは、ソウル市瑞草区盤浦洞と方背洞にわたっており、ソレ路の北側の入り口から南側の丘の上にある方背中学校までの約 530m の道路を中心に東西に広がっている。ソレ路は北から南の方に向けて緩やかな丘となっており、ソウル・フランス学校はソレ路の南側にある。ソレ路の両側には主に商業施設があり、また路

＜表 2＞ソウル・フランス学校の主要沿革

年度	主な内容
1974	ソウル市龍山区梨泰院洞で開校
1981	ソレマウルへ学校移転
1986	小学生の追加の受け入れ、学校拡大
1998	学校増築。スポーツ施設を備えた4階建てビルの建築
2001	ソウル市教育庁に学校登録
2002	在外フランス教育機関（AEFE）に加入。学校名を Lycée Français de Séoul（LFS）へ改名
2016	学校改増築 韓仏国交樹立 130 周年を記念して指定された「韓国内のフランスの年」と関連し、Lycée Français de Séoul の拡大プロジェクトを開始 ＊同プロジェクトは、前年 11 月 4 日に韓国の大統領とフランスの大統領が署名した「21 世紀における韓仏グローバル・パートナーシップの強化活動計画」の一環である。この計画において、「フランスと韓国は、学校の学生収容能力を高め、Lycée Français de Seoul の発展のために緊密に協力する」ことが定められた。このプロジェクトは、学校のスタッフや保護者、学生、駐韓フランス大使館、在外フランス教育機関（AEFE）、および LFS と保護者会（APE）のすべてのパートナーとの多くの話し合いの結果である。

＊ 出典：ソウル・フランス学校のホームページ（https://lfseoul.org/en/introduction/）から作成。

地の裏側には主に 3-4 階建ての小規模の高級マンション（韓国では、ヴィラと呼ばれている。）が建ち並ぶ閑静な住宅街が広がっている。

ソレ路の北側の入り口から歩いてみると、すぐのところにある街灯に韓国とフランスの国旗が掲げられていた。両国の旗はこの道が終わるところまで 10 カ所以上の街灯に飾られており、ソウル・フランス学校の正門の前にもあった。フランス学校の存在は、フランス村の形成の重要なきっかけともなっており、現在にもソレマウルのシンボルの一つである。フランス語で会話する子どもたちや保護者たちで溢れるフランス学校の登下校時間のソレ路の風景は、ソレマウルに外国人まち、とりわけ、フレンチ村としてのリアリティを与え、そのイメージを日常的に強化していく背景でもある。また、調査時点では、韓国でフランスの文化を伝播することを目標としたフランス学校のフランス・ソレプロジェクトが展開されていた。学校側の代表委員会と高校生たちが中心になって、学生たちの学業外活動の一環として、ソレマウルやソウルで暮らす韓国の人たちにフランス文化をより効果的な方法で伝えることを提案するため、道路名の標識や文化活動、音楽会、展示会の企画などの活動を行っていた。

また、ソレ路の中央には、「ソレ・グローバル・ヴィレッジ・センター」が位置している。2008 年 6 月に開館した同センターは、外国人住民専用センターとして、瑞草区がソウル市のソウル・グローバル・センターと連携して運営しており、外国人住民に対する日常生活に必要な情報の提供や、韓国人と外国人との間の文化交流活動のための多様な教育及び文化行事を行っている。ソウル・グローバル・ヴィレッジ・センターは、ソウル市の 7 カ所に設置されており、同センターはその一つである。ここでは、全ての国籍の外国人に、韓国語のレッスン及びその他の多様な文化体験授業（韓国の音楽、芸術、料理など）を実施しているが、同センターのウェブサイトには、各種の生活案内のほか、韓国作家の本とともにフランスの本が紹介されており、フランス童話の読み聞かせ授業が案内されているなど、フランスの文化紹介にも重点が置かれていることがうかがえる。また、面白いことに、

同センターが入っている建物の 1 階にはワインバーが、2 階にはフランス語の店舗名のヘアサロンが入店している。

フランス学校やソレ・グローバル・ヴィレッジ・センターのほかに、ソレ路には様々な建物や店が並んでいる。道の両側には 2 階から 7-8 階建ての建物が建ち並んでおり、飲食店が主流であるが小規模のマンションもあり、ソウルのほかの商業地区の繁華街ほど賑やかではないものの、どこかの観光地に来ているかのような雰囲気が感じられる。そして、飲食店には、韓国飲食店をはじめ日本食、イタリアン、フレンチ、ベトナムのレストランなど多様さが目立つ。全体的には韓国の飲食店が多いが、街に掲げられているフランスの国旗などのシンボルとの相乗効果なのか、フレンチレストランやワインバー、ベイカリーなどが目立つ。ソレ路の両側には、パン屋やコンビニ、銀行、クリニック、薬局、塾、美容室、エステサロン、化粧品ショップ、不動産仲介会社、ネットカフェなど日常生活をサポートする店舗が並んでおり、一見普通のソウルの街、江南（ソウルでは富村を象徴する）の街の風景とそれほど変わらない。ところが、ここにあるフレンチレストランやワインバー、パン屋、デザートの店や、少し裏側の道に入ると目に入る数軒のフレンチレストランは、数はそれほどではないが、ソウルの中ではなかなか味合うことのできない、フランス本場の味や雰囲気が楽しめるという評判で、多くのマスコミや SNS などに紹介され、多くの人たちが訪れる人気店になっている。こうしたソレマウルにあるフランス関連店の高い評判や人気が、ソレマウルのフランス村としての立地をより固める重要な要因の一つになっている。

また、ソレマウルとその周辺には、フランスまたはパリをつなげる場所がある。代表的なのは、「モンマルトル公園」と「パリ 15 区公園」である。ソレマウルの東南側にあるモンマルトル公園は、もともとはアカシアの木の野山であったが、2000 年にソウル市が盤浦地域の円滑な水道供給のための排水地工事を行う際に、ソウル市と瑞草区と協議を経て住民の休憩空間として誕生した。近くにあるソレマウルにフランス人が多く居住していることから、この公園の進入道路には「モンマルトルの道」、そしてこの公園には「モンマルトル公園」という名前がそれぞれ付けられた[11)]。この公園には、フランスのパリのモンマルトル丘で活動をした芸術家たちの作品を連想させる造形物が置かれており、ゴッホ、ゴーギャン、ピカソの彫刻像が設置されている。後述するが、毎年 6 月に開催される「盤浦ソレ韓仏音楽祝祭（Fête de la musique Corée-France）」の開催場所でもある。また、ソレ路の北側から入ってすぐの裏道には、「パリ 15 区公園」がある。2016 年に韓仏国交樹立 130 周年を記念して、瑞草区とパリの中で韓国人が最も多く居住しているパリ 15 区（パリ 20 区のうち一つ）との間で相互交流協力意向書が交わされた。その際、もともとあった公園（「銀杏の木の公園」[12)]）の名前を「パリ 15 区公園」へ改名し、ソレマウルの道路には「パリ 15 街」という名前が付けられた。ここでも様々なイベントが開催されており、例えば、毎年 12 月第 1 土曜日にはクリスマス・フランス伝統市場が在外フランス連合会と韓仏協会の主催で開催されており[13)]、2019 年 4 月には「ソレマウル、テーマのある街コンサート」が住民自治委員会の主催で開かれた。一方、フランスの中で韓国人が多く暮らしているフランスのパリ 15 区では、9 月に区庁前の広場で「コリアン・フェスティバル」が開催されており[14)]、2016 年 9 月には瑞草区から派遣された四物ノリ（韓国の伝統的打楽器演奏）公演団が同フェスティバルに参加するなど、瑞草区とパリ 15 区との交流が活発に行われている[15)]。

5. 盤浦ソレ韓仏音楽祝祭[16)]

ソレマウルのイベントの中で最も代表的なのは、モンマルトル公園で開かれる「盤浦ソレ韓仏音楽祝祭」(以下、韓仏音楽祝祭)である。韓仏音楽祝祭は、フランスの音楽祭(Fête de la musique)が元となるイベントで、当初はソウル・フランス学校で企画された小さい音楽祭から始まった。フランス音楽祭は、フランス政府文化省の文化大衆化政策の一環として、国民のみんながストリートに出て自由に音楽を楽しむ祝祭として、1982 年 6 月 21 日(夏至の日)に第 1 回の音楽祭が行われた。その期間中は、カフェやレストラン、そして大統領宮殿までもが開放され、国全体が巨大なコンサート会場に変わる巨大イベントになり、またより多くの人々が参加できるように、夏の季節に合わせて開催されることとなったが、海外に在住するフランス人のコミュニティにおいても、毎年同じ時期に開催される恒例の行事として発展していったのである。

韓国のソウル・フランス学校でも、フランス音楽祭の期間に合わせて、学校内の音楽イベントとして取り組んできたが、2008 年からは、瑞草区と協力して、韓仏音楽祝祭として開催されることとなった。その後、徐々に開催規模も大きくなり、10 年後には、まさに地域の代表的なイベントとして発展してきた。また、2016 年には、韓国とフランスの国交樹立 130 周年を記念して、より大規模のイベントとなった。瑞草区では、その前の年の 2015 年の 9 月に「瑞草、文化で一つになる」というテーマで、区の全域で同時多発的に展開される 6 日間のフェスティバルである「ソリプル・フェスティバル」[17)]を開催することとなった。第 1 回の開催の成功を受けて、翌年の 2016 年には、それまではフランス音楽祭の期間に合わせて毎年 6 月に開催されてきた韓仏音楽祝祭をこのフェスティバルの最終日に配置し、フィナーレを飾るイベントとして位置づけた。それ以降、韓仏音楽祝祭は、ソリプル・フェスティバルの一環として毎年 9 月に開催されることとなり、パレード、シャンソンコンテスト、韓仏ミュージシャンの公演、フランス文化体験などの大規模な祝祭として定着してきたのである。

韓仏音楽祝祭は、もともと韓国に暮らすフランス人たちの音楽祭として始まった。ソウル・フランス学校の学生が主体となって、本国における音楽の祝祭期間に合わせて、小さな音楽祭を学校の行事、あるいは、学校を中心とするフランス人のコミュニティの祭りとして取り組まれてきていた。フランスで人気のアーティストを招待して行われる公演を開催することで、韓国在住のフランス人にとってはフランス文化への愛着とプライドを確認できる機会でもあった。また在韓フランス人およびフランス語圏の人々の間の交流と出会いの場としての意味もあったといえる。ソウル・フランス学校とそのコミュニティが中心となるイベントであったものの、それはフランス人だけのイベントではなく、フランス語圏 (Francophone)国であるベルギー、スイス、ルクセンブルク、その他のアフリカ諸国人々にとっても、フランス語やフランス文化を共有できる人同士が、フランス語圏特有の文化を楽しむことができる共有場所的意味も大きかった。そして、フランス文化を韓国社会に向けて発信し、交通する役割も果たしてきた。このイベントをめぐっては、フランス大使館と瑞草区の行政の間でしっかりした連携が取られ、フランス人と彼／彼女らの文化に触れることができるイベントとして、徐々にホストコミュニティもその開催や運営に関わるようになってきた。当初、ソウル・フランス学校のイベントとして認知されていたものが、徐々にソレマウルの祝祭としての理解も広がってきたのである。さらに、K-POP の人気がヨーロッパでも広がるようになってからは、フランスの音楽祭という意味合いに加えて、K-POP と韓流文化の祭りとしての意味合いを併せ持つようになってきた。音楽祭の規模や知名度が上がるにつれて有名アーティストの出演も増えるようになり、出演するアーティストのパフォーマンスをみるために、韓国人やフランス人に加えて、様々な外国人た

ちが共に集まる場所になってきている。

この祭りの成功要因としては、プログラムの充実ぶりがまず挙げられるが、それを実現可能にしたのは、韓国とフランスの双方の国・行政の支援が欠かせない。フランス側は、大使館が全面的に協力しており、韓国側は、区と住民センターが協力を行っている。また、フランス大使館と自治体との間のしっかりした連携が何よりも肝心な点である。そして、そのようなサポートは、フランスとしては、ソフトパワーの資源としての文化を活用することがあり、自治体としても、フランス文化の魅力という資源を地域のソフトパワーの資源として再創造するという目標をもって、このイベントに取り組むことがあろう。そのような、いわば政治・経済的なサポート体制があってこそ、フランスのトップレベルのアーティストを招待して、高いレベルの音楽パフォーマンスをみせることができることとなったのではないだろうか。

また、メディアや市民社会の関心も欠かせない。この祭りは、フランスの音楽祝祭が韓国ソウルのソレマウルで行われるという意味もあれば、ソレマウルのフェスティバルである意味も備え持っている。すなわち、ローカル化されているのである。この祭りは、韓国人の祭りでもあり、韓国とフランスの架橋の役割をする新しい文化的空間でもある。韓仏音楽祝祭はフランス人と韓国人、そして他の外国人がお互いの文化を共有できるイベントとして位置づけられる。

6. まとめ

以上でみてきたように、ソレマウルは、フレンチ村として知られているが、フランス人の居住コミュニティというほどの集住がみられるわけではない。瑞草区に居住するフランス人の人口は、最大の外国人グループではないにもかかわらず、この地域を代表する外国人グループとして認知されており、その意味では、地域を象徴するシンボル的な存在となっている。住民のほとんどは韓国人であり、外国人が多く住む地域でもないが、ヨーロッパの雰囲気が融合された多文化な都市空間であり、同時に贅沢なイメージを醸し出す文化消費空間的特性をみせている。それには、韓国社会に存在する国や言語に対するヒエラルキーの認識などから、フランスのまちというイメージを必要とし、それをより広げていったことも考えられる。

こうしたフランス村としてのソレマウルの形成過程において、フランス学校の存在やその役割は大きい。教育のためにフランス人やフランス語圏からの家族がこの地域に集まることで、「生活者としてのフランス人」、「フランス人の生活を支える様々な店」、「フランス風のまちとしての風景」が、「フランス」をより目立つようにしたある種のエコロジーを形成していたといえよう。フランス人にとってのソレマウルは、何よりもまずフランス学校を中心に形成された生活空間であることがわかる。

その一方で、ソレマウルにおいては、ローカルコミュニティとフランス人のコミュニティの間において肯定的な相互作業も限定的な形でみられていることを確認できた。コミュニティとしてのソレマウルは、表の大通りから少し離れると、静かな住居空間で、そこでは韓国人と外国人が互恵的に共存している。先述したように、ソレマウルの住民の社会経済的地位はアッパーミドルクラス以上であり、町としての共同体が活性化されているというよりは、適当な距離が保たれており、行政サービスが充実しているなどの住居アメニティのレベルが高いという特徴をもつ。また、そのような特徴をもつ地域のコミュニティの中に、フランス人の集団が韓国人の地域コミュニティと交わり、多文化なコミュニティを形成しているというよりは、フランス人コミュニティと韓国人の地域社

会が互恵的に共存しているといえる。それには、言語疎通の問題が最も重要な要因ではあるが、その他の様々な理由により、フランス人と地域住民との直接の交流はほとんどない状況であるものの、フランス語を使用する複数のコミュニティの集まりとフランス学校を中心に社会的関係が形成されているという現状はみられ、また何よりも、盤浦ソレ韓仏音楽祝祭のようなイベントを媒介にして、文化的な交流が活発に行われている。そこでのフランス人コミュニティと韓国人との交流は限定的ではあるものの、音楽という文化を媒介にしての交流は二つまたはさらに複数の文化が交わる可能性をみせており、もともと、フランスに由来する韓仏音楽祝祭がフランス的な祭りだけにとどまらず、韓国人の祭りでもあり、両国の架橋の役割をする文化的空間として発展している状況がその可能性を物語っているといえよう。

ソレマウルにおけるフランス人と韓国社会との「肯定的」な相互作用は、この地域が専門職に従事しているフランス人を中心に形成されていることにも起因する。文化資本と経済力を有する外国人グループが比較的良好な環境の集住地域を形成することで、周辺の韓国人住民たちとも無理なく共存することができているのではないかと考えられる。また、そのような外国人の存在が地域に良いイメージを形成してくれることで、地域行政としても積極的に支援または活用しやすいことも推測できよう。こうしたこの地域への肯定的な外国人性や地域固有の雰囲気は、地域行政が主催または支援する様々なフランス文化関連イベントを開催することや、評判の良い異国風の店が立ち並ぶことで、いっそう強化されることになる。その一方で、過度な商業化によって、静かで豊な住居地域としてのイメージにやや変化も起きている。

以上のように、エスニック・マイノリティの集住地域などでみられる傾向とは異なる特徴をもつ「外国性をもつまち」としてのソレマウルでは、消費資本主義に駆動されたジェントリフィケーションとは異なる、コミュニティの再生としての多文化化や、外国人まちの形成の可能性を示唆しているケースとして注目される一例であるといえよう。

注

1) 韓国の法務部が発表したデータには、90 日を超えて滞在する長期外国人と 90 日以下を滞在する短期外国人が含まれている。

2) 2019 年の在韓外国人の 252 万 4,656 人のうち、長期外国人は 173 万 1,803 人で、短期外国人は 79 万 2,853 人である。構成比は、長期外国人が 69%、短期外国人が 31%である。

3) 2020 年の在韓外国人数は、前年対比 19.4%(488,581 人)が減少した 203 万 6,075 人を記録した。そのうち、長期外国人は、161 万 323 人で前年対比 7%減少にとどまったが、短期外国人は 42 万 5,752 人で前年対比 46%も減少した。構成比は、長期外国人が 79%、短期外国人が 21%である。

4) 김남영・장강호(『한국경제신문』, 2021.9.28)

5) 한종수(『뉴스 1』, 2021.11.1)

6) そのうち、東部二村洞、ソレマウル、梨泰院洞の三つの地域には、韓国政府(女性家族部)の主導の下で、外国人住民の生活支援のために運営されている「グローバル・ヴィレッジ・センター」(ソウル市内に全部7カ所)が設置されている。

7) 歴史的な経緯により負のイメージが纏われている他の外国性をもつまちの再生戦略においても、示唆を得ることができよう。また、グローバル都市におけるさまざまなローカルなまちにどのようにグローバル化が埋め込まれているのかにつ

いての比較研究としての意味もあろう(Zukin et al. 2015)。

8) Arirang News, 2016.6.2

9) ソウル・フランス学校については、同学校のホームページが参照されている(https://lfseoul.org/en/school-network/)。

10) ソウル・フランス学校のブロシュアより。

11) 韓国観光公社のホームページより。

12) この公園には、樹齢 390 年を超えた銀杏の木が植えられており、旧名称はここから由来している。毎年旧暦 10 月 1 日には、地域の繁栄と和合、平穏無事を祈る伝統信仰の祭祀(堂際)が住民たちの主催で開催されている。이경재(『시니어신문』、2016.10.30)。

13) 2003 年より毎年開催されてきた同行事は、新型コロナ・パンデミックの影響で、2020 年にはキャンセルされたが、2021 年にはオンラインで開催された。

14) パリでは、2004 年以降、在仏韓国人たちによる「ハンガウィ・フェスティバル」が開催されてきたが、2016 年には「コリアン・フェスティバル」へ改名され、場所も区庁前の広場と変更された。社団法人世界言論人協会のホームページより。「ハンガウィ」とは、韓国語でお盆(旧暦)を意味する。

15) 瑞草区庁のホームページより。

16) 韓仏音楽祝祭については、ソリプル・フェスティバルのホームページが参照されている。

17) 瑞草という地名は、ソリプルから由来したとされている(瑞草区庁のホームページ)。ソリとは霜を意味し、プルとは草を意味するハングル語(固有語)である。ソリプルとは、霜がついている草などを意味する。

参考文献および資料

Arirang News, 2016.6.2 (https://www.youtube.com/watch?v=CiCnrTBculs).

이일열, 2021,「국내 프랑스 공동체의 문화 정체성 연구 : 서래마을과 한불음악축제 사례를 중심으로」,『한국프랑스학논집』113, 한국프랑스학회, 283-310(=イイルヨル, 2021,「国内のフランス共同体の文化的アイデンティティに関する研究:ソレマウルと韓仏音楽祝祭の事例を中心に」,『韓国フランス学論集』113, 韓国フランス学会).

이경재, 2016,「서초구, 파리 15 구(은행나무)공원에서 서래당제 개최」,『시니어 신문』, 2016.10.30 (http://www.seniorsinmun.com/news/articleView.html?idxno=7620) (=イキョンジェ, 2016,「瑞草区, パリ 15 区(銀杏の木)公園でソレ堂祭開催」,『シニア新聞』, 2016 年 10 月 30 日).

김남영・장강호, 2021,「한류의 힘・・・코로나에도 외국인 유학생 늘었다」,『한국경제신문』, 2021.9.28 (https://www.hankyung.com/society/article/2021092814991)(=キムナムヨン・チャンガンホ, 2021,「韓流の力:コロナ禍の中でも外国人留学生が増えた」,『韓国経済新聞』, 2021 年 9 月 28 日).

Kim, Ho-Jeong & Mi-Ran Yang, 2017, "A Comparative Study on Residential Satisfaction in Relation to Spatial Characteristics of the Residential-Commercial Area in Urban Seoul Focused on the Analysis of Seorae Village of Banpo 4-dong and the Garosu-gil area of Sinsa-dong", *Journal of Asian Architecture and Building Engineering*,16(2), pp.295-302

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaabe/16/2/16_295/_article/-char/ja).

金兌恩, 2018,「韓国の多文化化と中国朝鮮族:ソウル・大林洞におけるフィールドノート」,『応用社会学研究』第 60 号, 立教大学社会学部, 227-239.

韓国観光公社のホームページ(https://korean.visitkorea.or.kr/detail/ms_detail.do?cotid=bc9d19cf-5589-477c-a98b-69fad1f526ee).

韓国統計庁(KOSIS)のホームページ(https://kosis.kr/statHtml/statHtml.do?orgId=111&tblId=DT_1B040A10&checkFlag=N).

韓国法務部のホームページ(https://www.moj.go.kr/moj/2412/subview.do).

Zukin, Sharon, Philip Kasinitz and Xiangming Chen, 2015, *Global Cities, Local Streets: Everyday Diversity from New York to Shanghai*, Routledge.

ソウル・フランス学校のホームページ(https://lfseoul.org/en/introduction/).

ソウル・フランス学校のブロシュア(https://lfseoul.org/wp-content/uploads/2021/06/KR-LFS-Brochure.pdf).

ソリプル・フェスティバルのホームページ(Seoripul.org/kor/main/main.jsp).

한종수, 2021,「'위드 코로나' 이달부터 외국인 노동자 입국 제한 푼다」,『뉴스 1』, 2021.11.1 (https://www.news1.kr/articles/?4478654)(=ハンジョンス, 2021,「『with コロナ』今月から外国人労働者の入国制限を緩和」,『News 1』, 2021 年 11 月 1 日).

Lees, Loretta, Hyun Bang Shin and Ernesto Lopez-Morales, 2016, *Planetary Gentrification*, Polity.